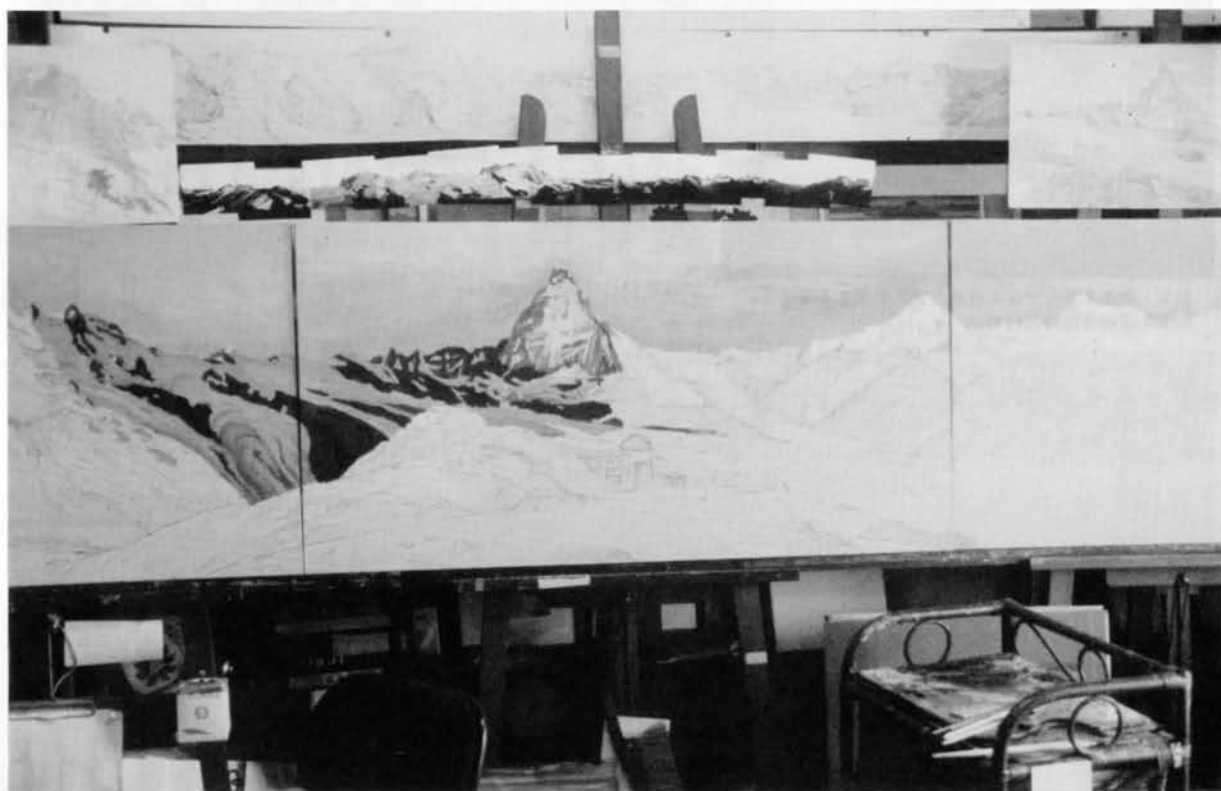


山と博物館

第42巻 第7号 1997年7月25日

大町山岳博物館

特集 世界三大山岳風景360度パノラマ完成記念 牧 潤一・山岳画展 7/19(土)~8/17(日)



パノラマ制作中の筆者画室（中央はマッターホルン）

パノラマを描く

牧 潤一

深田久弥先生の名著「日本百名山」につづく「世界百名山」(これは先生急逝のため残念ながら完成はみなかった)に刺激を受け、絵になる、絵に描きたい、ということに条件をいれて、自分なりに選んだ世界百名山を描くため、多年アルプス、ヒマラヤ、アンデスをはじめ方々をスケッチして歩いている。

そのなかで、ここだけは三六〇度グルリとパノラマに描きたいと思った場所が世界に三方所ある。

第一番はネパールヒマラヤの、エヴェレスト山はじめ八〇〇m峰が一度に四つほか、一九六四年に長野県山岳連盟隊が初登頂したギヤチュン・カン。カン(七九五二m)など、クーンブ山群の名峰が望めるゴキョ・ピーク(五三六〇m)。次がアルプスの盟主マッターホルン(四四七八m)ほかヴァリザイ・アルペンの山ほとんどが眺望できるゴルナーグラート。ここはツェルマットから登山電車でも行けるところだ。そして第三がわが日本の北穂高岳山頂である。ここからは北アルプス全域のみならず、南・中央アルプスのほか遠くは富士山、加賀白山までが構図よく見わたせる。

人を魅きつける展望とはその構図の好きと共に、ある程度のポピュラリティー(特に山に詳しくない人でも名前だけは聞いたことがあるという山がいくつもあること)が必要である。

「自選・世界百名山を描く」の達成はまだ相当の年月を要するし、自分の健康状態、世界の政治情勢さえからんでくるのでなかなか難しいが、以上に述べた三方所のパノラマ制作だけは実現したいとつとめてきたところ、最初の構想よりは相当小さくなったが(希望は各作品の全長二二・一五m。今回出品は各作品パネル六枚つなぎで全長七・二m)何とか無事に完成。大町山岳博物館という絶好の場所でお披露目できることになり嬉しく思っている。

更なる今後の大作作成のためにも(たとえば高原の四季と題して美ヶ原からの三六〇度のパノラマ)多くの方に見て頂き、ご叱正、ご激励を賜われれば幸いである。

(日本山岳協会会員)

大糸沿線スケッチポイント案内

牧 潤 一

松本市から日本海沿岸の糸魚川まで走るJR大糸線は、日本の鉄道の中でもよい風景や歴史・ロマンにも恵まれた路線の一つである。特に山が好きで絵も描くという方々には松本から南小谷（みなみおたり）と読み、松本からの直通電車の最終点）の三つ手前の駅、信濃森上までがよい。

もちろんそれから先にも姫川温泉などがあり、山間を抜けて糸魚川に出て、太平洋とは風情の異なる日本海を望んだ時の感慨も捨てたものではないことを念のために付け加えておく。

最初に言っておきたいのは、松本からこの線に乗る時はできれば進行方向に向かって左側（西側）に席を占めることだ。それと筆者はよく電車の窓からでも外の風景をスケッチするが、それには特急列車は速すぎる。通

勤・通学時間帯をはずした空いている鈍行がおすすめである。特急に抜かれる待ち時間、電車が止まっている間にスケッチに線を描き加えたり、鉛筆を削ったりする。

ついでに言えば車内で水彩で色を塗ることは不可能だから、色鉛筆でカンジンなどところに覚え程度に色をつけたり、それでもきなればスケッチの上にはこは「コゲ茶」とか「OG」（オーリーブ・グリーン）とかメモを入れておく。

× 電車が松本を出ると（出なくて）も、西側に堂々と聳えているのが常念岳である。鈍行でも三〇分足らずで穂高。時間の余裕があればここでまず途中下車。周辺のスケッチ

かたがた、碓氷山美術館、安曇野山岳美術館などを訪ねてみたい。最近では「ちひろ美術館」というものもオープンした。ここから白馬にかけては、ほかによい美術館、博物館が多い。よい絵を描こうと思ったら、よい絵をたくさん見ることが大切だ。

穂高から大町山岳博物館のある大町へも電車で約三〇分。同博物館は市内東側の高みになり、駅から徒歩約二〇分。タクシーなら五分、七百円くらい。

晴れていたら館内見学は後まわしにしても、三階の展望室に登って北アルプスの大景観を楽しみ、かつスケッチしよう。真正面の蓮華岳が実に立派。絵にはなりにくいかもしれないが山の量感をつかむよい勉強になるだろう。蓮華の左には北霧・船窪・不動岳、右は三ツ頭の爺ヶ岳、双耳峰の鹿島槍ヶ岳、五

童岳、そして白馬三山と、後立山と呼ばれる山並みがつづく。この景観は残雪のたっぷりある季節が特によい。山々の名前が知りたかったら展望室に丁寧な案内図がある。

山岳博物館には「カモシカ」「雷鳥」などを集めた小動物園もあり、動物の好きな人にはそれらのスケッチも楽しいだろう。この博物館はそれらの飼育でも有名などころである。大町からは黒部ダム・立山ケーブルへと観光ルートを訪ねるのもよいが、山の絵を描くのならちよつと苦勞だが（急坂を約四時間）種池山荘まで登って一泊、せめて爺ヶ岳中腹までの軽登山をすすめる。このあたりからは剣岳が私の一番好きな角度で望める。新越乗越の方へ少し行けば前景として手頃な樹木（シラビソなど）も多い。



松本・穂高あたりからとは形を変えて見える常念岳。池田町立美術館付近にて。



大町山岳博物館付近から鹿島槍ヶ岳



大町山岳博物館付近から五龍岳



種池付近から逆光の剣岳

いづれにしても白馬はその名の通り（本当の山の名のいわれはちよつと違うのだけれど長くなるので説明は止めるが、昔はシロウマ岳と言ったことだけは覚えておいてもらいたい。）マツ白に見える冬がよい。そして北海道を除く日本で、簡単に近くから白銀の山並みを描こうというのな

「山登りはどうも」という人たちには大町からまた電車で白馬の方へ向い、信濃木崎から稲尾あたりで下車。小半日をかけて木崎・中綱・青木の仁科三湖湖畔の散策がよからう。湖畔には大きな杉の木などがあり、山を描く格好な前景となる。山が見えなければ森や湖だけでも絵になる。

このあたりも私の好きな場所で、今までに相当描いている。遠い昔のことだが一水会の故中村琢二・野村光司両先生をボートに乗せて、夜の木崎湖を漕ぎまわったのも、懐かしい思い出である。

それぞれの湖畔には民宿から上等まで、宿も散在している。もちろん電車の中からボン

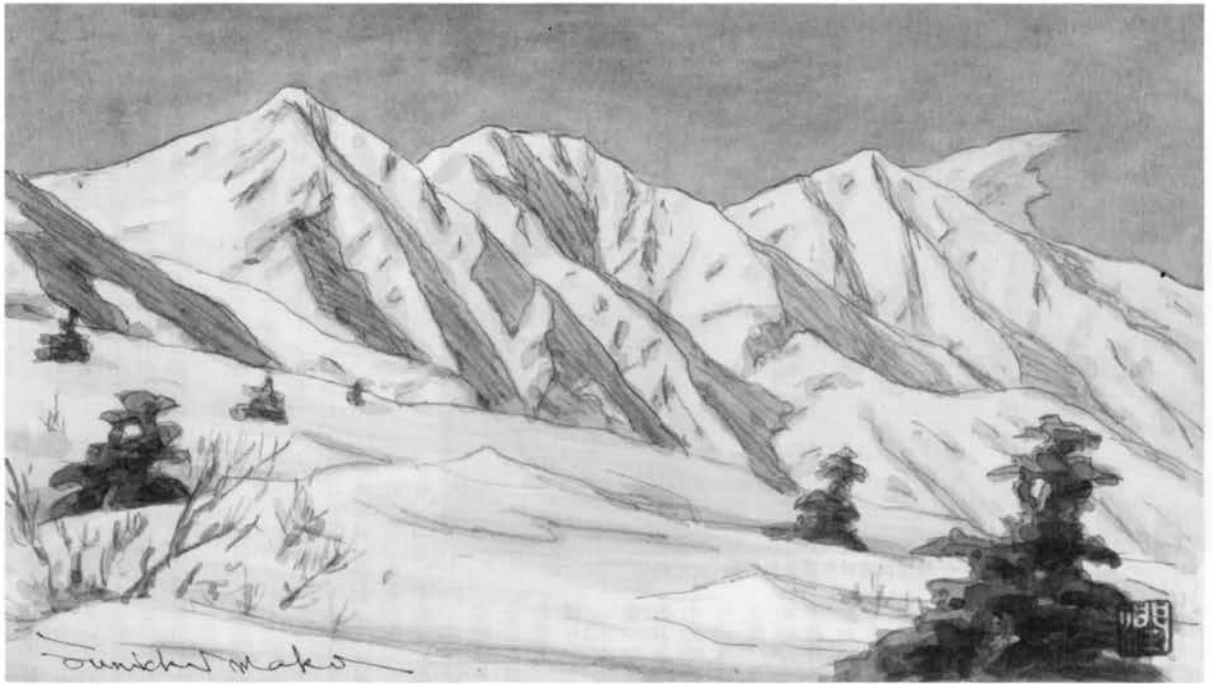
ヤリ景色を見ているだけでもよいところである。

さて、これからいよいよ白馬。信濃四つ谷という風情のある駅名も、いつの間にかこう変わってしまった。そして沿線にはモダンな建物や電柱などもやたら増えた。写真家は大変困っている。しかし、絵では画家の特権でそんな余計なものは描かなければよいのだから幸いである。おおいに天地創造・構図造成の特権を生かそう。『よい絵』にするためなら山の形をうんと変えてもよいのだ。タダそんな時には題を「何々山」としなさいこと。「これは山の形が違っている」と難クセをつける「山通」が必ずいるものだから。

余談はさておき、白馬周辺で絵描きさんの一番よく行くところは、駅前の広い道を少し北上、右へ曲がって踏切を渡り、一〇分ばかり歩いて「大出」の集落を過ぎ、橋を渡った姫川右岸の広場。まだ葉ぶきの家も残り、大きな杉木立の彼方に白馬三山（左から白馬鍾ヶ岳・杓子岳・白馬主峰。中では鐘が一番カッコいい）が並ぶ。私もスケッチ教室の参加者を連れて何度か行ったけれど、いつもウィークエンドは川に面して晝架の行列である。



「大出」から白馬主峰



八方尾根から雪の白馬三山。主峰は実際より少し大きく描いた。

是非スキーシーズンの八方尾根・兔平までゴンドラで、そこからもう一本リフトで上まであがってもらいたい。そこからは三山のみならず、五竜岳・鹿島槍ヶ岳も「すぐそこ」に見える。寒くなったら兔平のレストハウスの東側の窓からでも、雨飾・高妻・浅間など深田さんの「日本百名山」に入っている山々がスケッチできる。白馬の次の駅が信濃森上。このあたりからは晩秋の、新雪をかぶった五竜岳が形よい。さらにもう一つ先が白馬大池・高山植物を安直に描こうと思ったらここからバスで梅池高原に行き、そこからゴンドラを乗りついで梅池自然園がよい。多くの花は梅雨明けから咲きます。

このあたりからは「斜にかまえた形」の白馬主峰も描ける。日本山岳画協会の大先輩・故足立真一郎先生がよく題材とされたところだ。今年（平成九年）六月初旬、この原稿を書くために取材・確認かたがた久しぶりに大糸線に乗り、直通終点の南小谷まで行ってみた。おそらく十数年ぶりであったろう。まず駅周辺に家の増えているのに驚いた。そして昔駅前から北側の山の上に雲を出して何とか絵をまとめたの思い出した。せっかくなのだからと今度は手前に姫川をいれてスケッチを出したので途中で止めて次の松本行きでトンボ帰りました。というわけで久しぶりの大糸線で岳ビルを飲み飲み移りゆく車窓風景を楽しんだが（これができるのが電車の何よりよいところ）、マイカー族も多い昨今、ハイウェイ（長野野道）でのスケッチポイントも一つ。おすすめは梓川SAの展望台。上りでも下り線でもよい。両方とも丘の上に屋根付きの休息所が設けてある。残雪のたつぷりある頃の午前中の常念岳もよいが、私は暮れなずむ爺ヶ岳・鹿島槍ヶ岳が好きだ。天候さえよければここで山々が濃紫の空に沈んでゆくまで、スケッチの後ほんやりとして時を過ごす。車さえあれば他にも簡単に行けるよい場所が多い。たとえば国道四〇六号を長野方面に向かい、ピンカールの坂を登り切ってトンネルの手前の平場がスモモ平。ここからもやはり夕刻、茜色の空を背にした五竜岳や鹿島槍ヶ岳がよい。それにしてもよいスケッチポイントを得ようとしたら地図やガイドブックだけでなく、その地域の写真集を参考にすることだ。安曇



「信濃」には「そば」のほかおいしい物もたくさんあるが「イナゴは難しいぞなモシ」

野周辺では槍岳山荘の穂刈さんや燕山荘の赤沼さんのものなど、よいものがたくさん出版されている。八方尾根からより更に五竜岳を大きく、描こうとするなら、白馬の一つ手前、神城で下車。そこから徒歩約三〇分、スキー場に行き、テレキャビン（約一〇分）で地蔵平に登ってみるとよい。八方尾根越しに頭を出す白馬三山もよいので、ここも一度スケッチ教室の人たちを連れて行ったら「アラ、こんないところがあるんですか」と喜んでいたので最後になったが書き添えておく。ただし時期によってはテレキャビンは運行していないので事前に確認してもらいたい。

（日本山岳画協会会員）

長野県のアオマツムシ

倉田 稔

アオマツムシは何者だ

中国南部、杭州付近が原産地のバッタ目、コオロギ科の夜行性の鳴く虫で、日本には生息していなかった。

そんな虫が、おおよそ百年前（一八九八年）東京の赤坂で発見された。アオマツムシは、卵、幼生、幼虫とその生涯を樹上で生活するため、恐らく、中国から輸入された庭木や街路樹と共に日本に來た虫と思われる。

アオマツムシは、名前のとおり全身緑色で、



写真1. アオマツムシの雄 16-IX-1992, 長野市松代町にて

成虫は体長が二、五センチメートルほどで、木の葉にへばりつくような小さな脚が六本あり、樹上で葉にへばりついている（写真参照）。そして夏から初秋にかけ、夜に樹上で「リーリーリー……」又は「チリー、チリー、チリー……」と金属的な高音で鳴きつづけるが、その音（鳴き声）がきわめて大きく、騒音に近いので、誰の耳にも違和音として聞こえてくる。

同じ季節に、コオロギなども夜になると泣きだが、人が近づいたり車が近づくときコオロギなどは鳴き止んでしまうが、このアオマツムシは鳴きつづけている。

都会型、町型の虫だ

このアオマツムシは、今のところ街路樹や人家の周辺に植えられている樹木だけにいて、山林にはいない。

いわゆる明るい街や人家のまわりの樹木だけに住みついている「都会型の渡来昆虫」で、同じ渡来昆虫のアメリカシロヒトリと、その生態はよく似ている。

アオマツムシが、最もよく鳴くのは八月下旬から九月上旬の、日没一時間後の午後八時から九時半頃までで、それ以後は鳴く数も減り午後一〇時すぎになると、ピタッと鳴き止んでしまう。

アオマツムシも鳴くのは雄だけで、鳴いている雄は、樹木の葉上で、体を少し持ち上げるようにして、両翅を背の上に垂直から八

十度位に立って、高速で両翅をすり合わせ激しい鳴き声を発する。

アオマツムシが鳴きはじめる時、その鳴き声があまりに騒々しいので、近くで鳴いているコオロギなどの鳴き声は、完全にかき消されてしまう。

長野県への侵入がはじまる

こんなアオマツムシが最近長野県内の市街地や住宅地に棲みついて、その勢力を広めていることがわかった。

そのきっかけは一九八三年八月二日の夜、長野市の川中島地籍の交叉点の信号機のすぐ横で店を開いていた植木屋の庭に置いてあった商品の植木（三メートルほどのナツツバキ）の葉上で、激しく鳴きつづける個体の確認であった。

私は早々、その鳴き声を録音し、一九六六年に東京で録音した鳴き声と比較して、アオマツムシであることを確認した。

その夜も、信号機が鳴ろうが、車のクラクションが鳴ろうが、平気で鳴きつづけていたので、これらの雑音と共にそのまま録音されている。

調査は一九六七年よりはじめた

私は一九六六年、東京都立大、理学部で勉強させてもらったが、その時の宿舎である目黒区や大学のある世田谷区では、夜になると毎夜、本種がけたたましく鳴きつづけていた。私は、はじめて聞く虫の声であったので、樹上に登り、虫を捕まえ、その鳴き声の正体をはじめて知り、その来歴も知った。

一九六七年、松本市へ帰ってから、私は「やがて、このアオマツムシも信州へ来るかもしれない」と考え、一八六七年の夏から、松本市を中心に調査を開始した。

調査は、夜、自家用車で松本、塩尻、諏訪、豊科と中信地区をまわり、調査地では、歩いて鳴き声を求めて町中を歩いた。

しかし、何の手がかりもなく、一九七三年に飯山市へ移り住んだ。

それからは、飯山市、長野市、須坂市、更埴市を中心に調査を進めたが、一九八二年までは、ほとんど鳴き声を聞くことはできなかった。

アオマツムシは全県に広まっている

ところが、一九八三年の夏に、ついに長野市川中島の国道一八号線の十字路の植木屋で、前記のとおり、はじめて本種の鳴き声を記録することができた。

そればかりか、その後の調査で少しづつ分布が広がっていることをつきとめることができ、急速に全県に広がりがつつあることもわかった。

私の調査をもとに、文献にある分布地（侵入地）も記入して示したのが、図1である。

●印は、私が直接、鳴き声を確認した地点で、○印は文献にあった地点を示しているが、個体数の多少を示しているわけではない。

年度別に、鳴き声を確認した市町村は、つぎのとおりである。文献より拾った市町村は（文献）とした。

- 一九八〇年 木曾郡南木曾町（文献）
- 一九八三年 長野市、更埴市。
- 一九八四年 長野市、更埴市、伊那市（文献）
- 一九八五年 長野市、更埴市。
- 一九八六年 調査できず。別所（文献）
- 一九八七年 長野市、更埴市、松本市、南木曾町。
- 一九八八年 長野市、更埴市、上田市、松

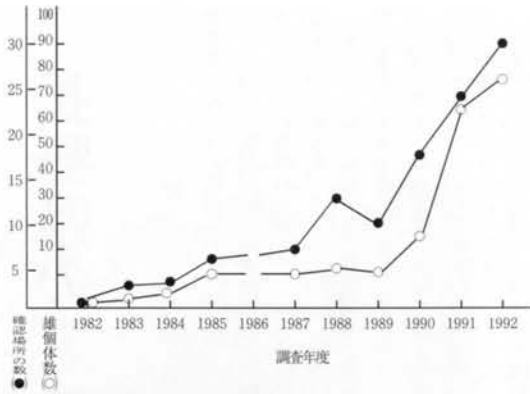


図2. 長野県の中中部、北部におけるアオマツシ雄 (聴いていた) 個体数と記録場所の年変化

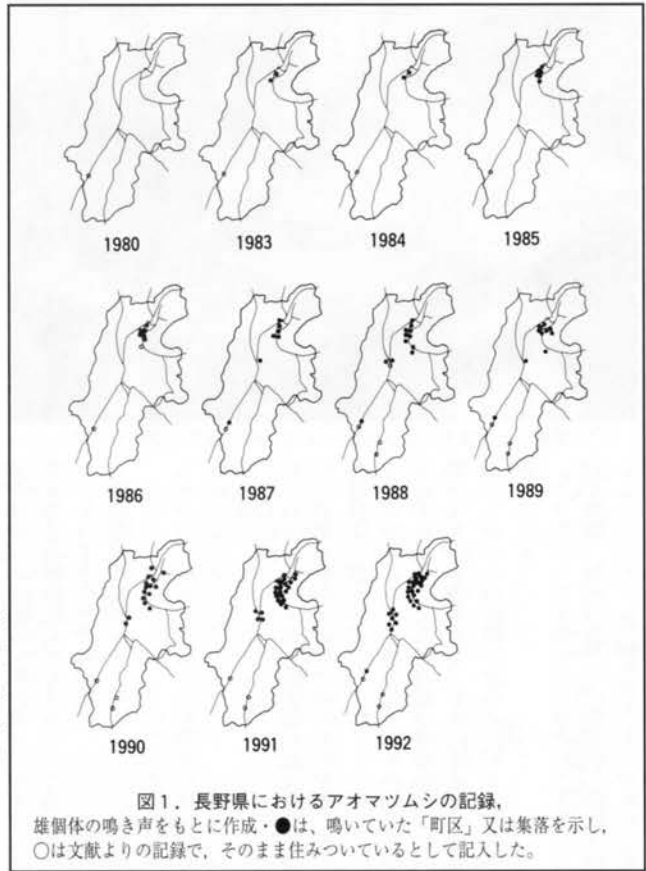


図1. 長野県におけるアオマツシの記録, 雄個体の鳴き声をもとに作成・●は、鳴いていた「町区」又は集落を示し、○は文献よりの記録で、そのまま住みついているとして記入した。

- このような調査の結果から、アオマツシ
- 一九九二年 長野市、須坂市、更埴市、埴科郡戸倉町、坂城町、上田市、松本市、塩尻市、木曾郡南木曾町。
 - 一九九一年 長野市、更埴市、埴科郡戸倉町、坂城町、上田市、埴科郡戸倉町、坂城町、松本市。
 - 一九九〇年 長野市、須坂市、更埴市、埴科郡戸倉町、坂城町、上田市、松本市。
 - 一九八九年 長野市、更埴市、埴科郡戸倉町、松本市。
 - 本市、南木曾町。
 - 駒ヶ根市 (文献)、飯田市 (文献)

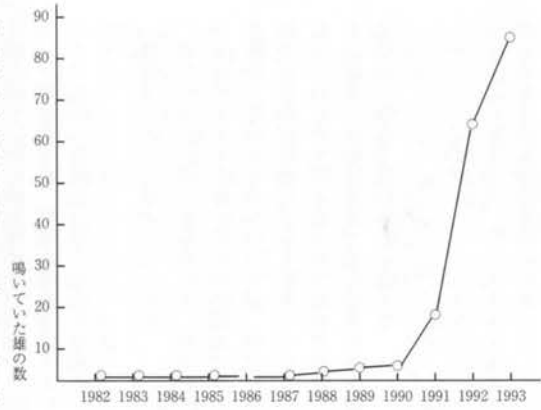


図3. 長野市松代町におけるアオマツシの鳴いていた雄個体数の年変化

この関係をより明確にするため、年ごとに、各地で確認した鳴いていた虫 (雄) の数が、どのように変化してきたか、を示したのが図2である。

黒丸は私が鳴き声を確認した場所の数を示し、白丸は鳴き声から推定した、鳴いていたアオマツシの個体数を示している。

この図に示した虫の個体数は、鳴き声から推定したので雄の個体数ということになる。実際には、これに雌の個体数加わるから、仮に雄と雌の比が1対1とすると、個体数はこのグラフの数値の二倍になるはずである。

この図からもわかるように、一九八〇年代のはじめ頃から長野県内へ侵入したアオマツシは、一九八〇年代の後半には、ほぼ定着し、

棲みついたものと考えられる。

図3は、私が住んでいる長野市松代町での調査結果である。松代町は長野市街 (JR長野駅) から南へ約二キロメートル離れた人口約二万人程度の昔の城下町で、市街地からは、犀川と千曲川、田畑地帯等によって隔離されている。

この松代町では一九八八年にはじめて鳴き声を確認したが、それ以後、急激に増えていった。

長野市で、最初に確認してから五年目であった。

そして、現在では確実に棲みついている。

大町市には、いるだろうか？

現在、松本市では確実に棲みついて、個体数も増えているので、豊科町、穂高町というように順次生息地を北へも広げていくことが考えられる。

それとも、庭木や街路樹と共に、いつか大町へ棲みつくようになるかもしれない。関心や興味ある方々の調査により、このアオマツシが、どのように大町市へ侵入し、棲みついていくか明らかになれば、郷土の自然の姿を知る大きな手がかりとなるように思う。大町のみなさんのご活躍を、ご期待しています。

(博物館学芸員)

山と博物館第42巻第7号

発行 一九九七年七月二十五日発行
〒388長野県大町市大字大町八〇五六一
大町山岳博物館

TEL 026-1-1131021

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額 一、五〇〇円 (送料長切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七三三九三